

暫く帰国は中止」と伝えられ、空しさが胸にこみあげて涙が出た。早速周辺の收容所に入り、それから約九カ月、港の建設工事でノルマ達成に駆り立てられた。

二十四年七月、漸く待望の帰国者名簿が発表され、私もその一人として永徳丸に乗船、二日後に、二度と踏むことはないと言ったこともあった懐かしい祖国を、舞鶴の平栈橋で帰国の第一歩を踏みしめた。舞鶴での復員業務を終え、一路故郷へ。九日、懐かしいわが家に七年ぶりに帰り着いた。その時の情景は今も臉に映像の如くハッキリと残っている。

復員後

復員後の二十四年十月、同郷の坂本家に養子となり、宮内村役場に奉職（現保内町）。

五十一年、教育長、中央公民館長を最後に二十六年間の勤めを終え、退職後、町議会議員を二期、行政相談委員、町遺族会長等を務め、微力を尽くしたつもりであります。現在は、老体に鞭打って農作業に励みながら、志を果たし得ず酷寒の凍土で眠っている同胞を偲びながら、戦友会、シベリア抑留者の会合や催しに

は万難を排して参加しようと心に決めています。

【執筆者の紹介】

昭和二十年八月二十日 石頭で終戦 歩兵二六六連

隊第三大隊

九月 入ソ ビロビジャン四六収

容所

昭和二十四年七月 復員、帰国

復員後、地方公務員となり、現在、農業

（愛媛県 山本 繁夫）

国際ラーゲルの囚人たち

熊本県 南部 吉正

昭和二十八年十二月一日、やっとの思いで祖国の港町舞鶴の地に上陸した。昭和十五年正月に故郷の村を出て以来十四年ぶりの帰郷であった。

シベリアではずっと、イルクーツク周辺の国際ラー

ゲルを転々として過ごしてきた。それらのラーゲル（収容所）の正式名称が何であったかは知らない。ロシア人の一人はオーゼロ（湖）ラーゲルと言っていたが、それはバイカル湖にカムフラージュした秘匿名であり、本当の名称はアソーブ（特別）ザクリュチョンヌイ（囚人）ラーゲル（収容所）で、政治犯を収容しているところだ、と言っていた。

樺太（サハリン）の特務機関に籍をおいて、越境してくるスパイや逃亡兵、一般市民などの取り調べに当たったり、島内在住のロシア人、原住民に教育訓練をしたり、機関内ではロシア側のラジオ放送を傍受していたロシア人夫妻の監督をしたりしていたので、進駐してきたソ連軍に真っ先に捕らえられた。結果は、ソ連の軍事機密を盗んだとの理由による、十年の強制労働刑であった。

自らの国の領土内で、合法的に情報収集をしたのが、何で相手国の軍事裁判にかけられ、刑を受けねばならないのか、という疑問は、独房にいる間も、雑居房に移った後も付きまとった。だが解答は得られな

った。最後は決まったように、負けたから仕方ないのだ、勝てば官軍なんだからと、無理に自らに言い聞かせたのである。

八カ月間も豊原市にあった刑務所に収監されて、昭和二十一年四月末日に内務人民委員部所属の兵士に警備されて駅へ向かった。総勢百人近くの、特務機関員を中心とする囚人の一団であった。女性も五人含まれていた。

焼け落ちた真岡の港から、ドイツ船籍の残る貨客船に追い込まれて、港を出た。船倉には樺太で獲れた鮭が塩漬けされて、バラ積みされていた。中野学校で一年後輩だったS君が、その船倉の塩鮭の山へ向かって、甲板から放尿した。「鮭泥棒どもに制裁してやる!!」そばにいた二、三人の兵隊が一斉にそれにならった。

船内ではハンモックで過ごした。船が揺れるたびに樽の中の糞尿が甲板に流れ出た。

三日目の早朝、貨客船は無数の船が碇を下ろしている大きな港に入った。ウラジオストックであった。私

達は石畳の坂の道を、警備兵に追われながら歩いていった。樺太から後生大事に担いできた布団を、坂道の途中で放り出す者がいた。すると、道路の両側に立って一行を物珍しそうに眺めていた子供達が、奪い合いながらその布団を拾った。

ウラジオ刑務所は、坂の上に五階建ての偉容を誇っていた。私達は二十人ずつに分けられて、だだっ広いセメント床の房内に押し込められた。ベッド一つなかった。床の上に、ある者は軍隊毛布を、ある者は外套を敷いて横になった。五月の初め、セメントの床は冷えて切っていた。

一日当たり五百グラムの黒パンが支給された。スープはなく、熱いお湯がバケツのまま房内に運び込まれた。お互いに語り合う話題もなかった。明日からどんな生活が待っているのか、見当はつかなかった。

一週間目、一人当たり一本の木枕のような黒パンと三匹宛の塩鯺が渡された。看守は、六日分の食糧だと言いい、それらを持って房外に出るよう命じた。長い旅になるなあ。私達は口には出さなかったが、これから

すぐ起こるだろうシベリア鉄道の長い道のりを想像したのであった。

ウラジオ刑務所前広場に、五列縦隊に並んだ。先頭の方から幌付きのトラックに押し込められた。トラックは坂の道を下っていった。十数分も走ったと思う頃、トラックは停まった。そこは無数の引込線が走っているウラジオストックの駅であった。

多分四人専用の護送車だろう、その引込線の中に二両が停まっている。乗車すると中は五つの房に仕切られており、片側は通路となって警備兵が立っている。一房に十人宛追い込まれた。通路側には鉄格子が張ってある。両側の壁は二段となっている。とすると床まで含めて六人用の房だろうが、そこに十人押し込められてしまったのだ。私達は相談の末、中の段に二人、下の床に四人、上段に二人が起居することにした。上段を除いて窮屈であるが、我慢する外はない。上段の中央には小窓があった。そこは特等席であるので、半日交替で入れかわることにした。ただしその席に位置する者は、車外に展開する風景を皆に知らせる義務を

負わせることにした。

自分の定位置が決まると、みんなはこれまでの空腹感をにわかにも思い起こしたように、六日分の黒パンにかじりついたのであった。

北海道は江差出身のS君は、入隊まで漁師をしていたと言い、久しぶりの鰯の塩漬けに舌鼓を打っていた。「パンをやるので鰯と代えてくれんな」S君はそう言つて、小割りした黒パンを私にくれた。そのS君に、私は大ぶりの塩鰯を一匹くれてやった。

実際ロシア式の塩漬け鰯は、程よく塩味が利いていて、飢えている口には何とも言えない味だった。S君はうまい、うまいと言いながら、頭から二匹も平らげてしまった。「ロスケから学ぶものは何も無いが、鰯の塩漬けだけは別だよ、帰ったらロシア式塩漬け鰯をつくらねばならんな」そう言っていたS君だが、二匹も一度に食つたので喉が乾くようになったらしく、盛んに警備兵に訴えだした。「ダワイ、ワダー（水をくれ）」警備兵は取り合わなかった。水を与えると次はトイレに出さねばならぬという悪循環を、知っていた

からである。彼らが用便のために扉を開けるのは、朝夕の二回だけであった。お湯は一回きり、それ以外は如何なる要求も聞かなかった。

長い貨物列車の後尾に二両つなされた囚人車。ロシア人達はその鉄格子のはまった囚人車をスタローヒンスキーワゴンと言っていた。何でも帝政ロシア最後の内務大臣だったスタローヒンが、ボルシェビキをシベリア送りするために考案した囚人車だという話であった。囚人車によるシベリアの旅は、何もかも窮屈であった。ハバロフスクの駅では、半日以上も引込線上に放置されたまま動かかなかった。

上段の席を占めた者は、それでも変わり行く窓外の風景を皆に知らせた。「白樺林が続いている、人家は一軒も見えないな」「家が四、五軒見える。牧場だろうか、牛が五、六頭いる」「湖らしいものが見える、いや海かもしれないな。船らしいものは見えない」六日目に入っていた。私はバイカル湖かもしれない、と思った。極東ソ連の地図は樺太の工作室の壁にかけて朝夕眺めていたので、大方の見当はつく。「どれどれ、

おれにも見せてくれ」私は窓枠によじ登って、外を眺めた。たしかに海みたいに青い水がひろがっている。

「オーゼロ・バイカルに違いない」「おれにも見せてくれ」みんなが交替で小窓から外を眺めた。湖岸を巡りながら走る長い列車の先頭部分が、はつきりと見える。白樺も落葉松も、すでに若葉を広げている。季節は春を迎えつつあるというのに、おれ達は囚人車に押し込められて、明日をも知れぬシベリア鉄道の旅を続けていたのだった。

列車は半日以上も湖岸を走って、夜半にどこかの街の駅に着いたようであった。警備兵は列車を下りて行ったが、私達を下ろしてくれる気配はなかった。小窓からは高層の建物の灯りも見える。

早朝、私達はブラットホームもない引込線の中に下ろされた。そこはイルクーツクの駅であった。何回も人員点呼をされた後、六人の警備兵に囲まれて駅前の大通りを歩いていった。やがて大きな橋にかかった。バイカル湖から唯一流出するアンガラ河に架かるアンガラ大橋であった。

警備兵が突然「ストーイ（止まれ）」と大声をあげた。見ると橋の向こう側から牛の大群が牧夫に追われてやって来るのが見える。人もトラックも停まっっている。私達も命ぜられるままに橋の片側によけた。コルホーズの牛は、橋の中央を脱糞しながら悠々と歩いてゆく。これが社会主義国ロシアの風景なのか、と思いつながら、私達は牛の大群が通り過ぎるのをじっと待ったのである。

橋の向こう側は、イルクーツクの新市街であった。

高層の煉瓦積み建物が連なっている。楡の木だらうか、街路樹の下に落花した白い花びらが散り敷いている。それらの落花を掃いている組の男は、抑留されている日本人に違いなかった。私達の一行の誰かが、箒を持って掃いている男に声を掛けた。「日本へ帰られたら、二十年の刑を受けてシベリア奥地へ送られた者がいることを伝えて下さい！」だが箒を手にする男たちは、私達の一行を振り向くことはなかった。

五キロメートルほど歩かされたらどうか、高い木の扉を巡らした、刑務所らしい門の前に着いた。「サ

ジーシ（座れ）」警備兵が叫んだ。ギーという音がして木の扉が開き、私達は名簿順に一人ずつ読みあげられた。首実検をされて、済んだ者は扉の中に消えていった。私の順番となった。受領する側の警備兵が、「ヤボンスキー・シュピオン（日本人スパイ）」といって私の顔に嫌味のもった瞳を向けた。

腹も減っていたが、喉も乾いていた。私達は雨樋の下に据えてある樽の中に首を突っ込み、ポーフラが浮き沈みする雨水を争って飲んだ。

五十人ずつ二組に分けられて、薄暗い大部屋に入れられた。中央はセメントの床であり、三方の壁際に沿って二段の板が並べてある。旅の終わりは、薄暗い雑居房の大部屋であった。

ウラジオを出て七日目、出るときももらったパンは昨日で終わっているはずだ。その六日分を、四日で食い尽くした者もいる。とにかく腹がすいて目まいがする程である。「今日のパンをもらうよう交渉すべきだ」誰かが言い、そうだそうだと声を和した。特務機関で通訳をしていた大阪外語出のK君が交渉に当たること

になった。鉄の扉をドンドン叩いて看守を呼んだ。「パンをくれ、ウラジオを出るとき六日分もらったが、昨日で終わっている」看守は意外にも、今日までのパンは支給済みだ、と言ってさっさと扉を閉めて行ってしまった。「そんな馬鹿なことがあるか」四、五人寄ってたかって扉を叩いたが、看守は再び顔を見せることはなかった。「ニチエボー（どうにもならない）」K君はロシア語で言い、ロシア風に両手を広げてみせた。

私達は諦めて、二段棧敷に横になった。それでも夕方になると、スープの樽がロシア人らしい二人の男によって運び込まれた。「カチエローク・ダワイ（飯盒を出せ）」飯盒のある者は一人もいなかった。樺太の刑務所に収容されるとき、金属製のものは釘に至るまで切り取られたからである。「カチエローク・ニエーツ（飯盒はない）」「そんなら帽子を出せ」私達は軍帽を出した。熱いスープが軍帽の布目を通してしたり落ちた。慌てて口を付けると、スープは舌を焼くように熱かった。しゃがみ込んで、床に落ちたスープをす

する者がいた。泣くにも泣けない惨めな思いが、胸の中を通り過ぎていった。

私達が収容された所は、刑務所ではなく囚人の中継所であった。通称ベレシルカ。シベリア鉄道沿いの大きな都市、たとえばハバロフスク、イルクーツク、クラスノヤルスクといった街には、この種のベレシルカが存在した。東ヨーロッパや極東から送られて来た囚人は、このベレシルカで二、三日休養し、新しく編成されて奥地のラーゲルに送られていった。

樺太のC警察署にいたという元警察官の中年の人がいた。Oというその元警察官は、リュックサックの中に奥さんの赤い腰巻を入れていたのだった。「樺にしたいが、誰か鋏を持ちませんか」Oさんは私の方に向かって問いかけた。「鋏はないがカミノリならありますよ」どこに隠していたのか、S君がこたえた。「それでもいいですよ、貸して下さい」「切ったら、ほくにも一枚分下さい」私はOさんの裁断を手伝いながら言った。刑務所に呼び出される主人のリュックサックの中に、自らの腰巻を忍び込ませたのは、奥さんの断ち

がたい愛情だろうか、と私は想像した。

そのとき、どこからか、スルーシャイ(聞こえるか)という押し殺した声が聞こえた。「スルーシャイ・ムジーク(聞こえるか、男の人)」再び声があった。後ろの壁を見ると、三センチ程の隙間があり、そこから青い眼がのぞいているのである。

「そのマチエリヤ(布)をくれないか」女の眼が、赤い腰巻に注がれているのだ。「何にするのだ」私は女に聞いた。「ブラトーク(頭巾)に使うのさ」私はOさんに、隣室の女が腰巻の布地を欲しがっている旨伝えた。「パンと替えたらどうですか」S君が言った。「いいでしょう、一枚分ぐらいなら」Oさんが答えた。私は壁の向こう側の女に、パンとの交換を持ち掛けてみた。「どれくらいほしいか、パンは？」「二キロだ」私は少し多めに要求した。「二キロは多過ぎる、一キロでどう？」「だめだ、二キロだ」女が、真から欲しがっていることを、私は見抜いていた。女は暫く考えていたようだが、いいだろう、今切るから待ってくれといった。

壁の隙間からのぞくと、老若の婦人が棚段の上に數十人が腰を下ろしている。白い肌をさらして縫物をしている中年婦人、若いブロードの髪の女三人が語り合っている。横になっている年かきの婦人、先程布切れを要求した三十過ぎと思える女が、黒パンを輪切りしている姿が見える。

やがて、切り終えたのか、再び件の女の眼が壁の向こう側からのぞいた。「パンを今渡すから、その前にマチエリヤ（布切れ）をよこしな」「パンが先だ、マチエリヤは必ず渡す」私はこたえた。女は信ずる気になつたのか、輪切りしたパンを壁の隙間から差し出し始めたのだった。「これで終わりだ、二キロはある」私は受け取った五枚のパンを重ねてみた。秤がないので正確には分からぬが、二キロはありそうに思えた。「ほら、クラスヌイ・マチエリヤ（赤い布切れ）だ」「スパシイボ（ありがとう）」女はウインクをみせて布切れを受け取った。見ると女は、その赤い布切れを早速頭にかむって、近くの女達に話しかけているのだ。た。

私達は腰巻がプラトック（頭巾）に化け、さらに黒パンに変化したことを笑いながら、思いがけない腰巻の恵みに腹をふくらましたのであった。

イルクーツクのペレンルカ（囚人中継所）に三日いて、四日目には再び西行する囚人列車に追いつめられた。五、六時間走った後カンスクという小駅で下ろされたが、迎えの警備兵が来ていないというので、町はずれの刑務所に行くことになった。ようやく伸びかけたライ麦畑を突っ切って、高い塀に囲まれた刑務所に着いた。私はここで発熱して医務室に収容されてしまった。一日に二回、確実に悪寒が襲い、やがて熱が身を焼き、ぐっしょりと発汗するのだ。女医が私の手を握り、シベリア・マラリアだと告げた。「心配するな、この薬を飲むとすぐ治る」女医がくれた黄色い粉薬は、キニーネに違いなかった。私は震える手で、その粉薬を喉に通した。朝夕二回の震えと発熱は、それも三日間続いた。

五日目、食い残したパンをリュックサックに詰めて退室すると、同行の日本人はすでに出発した後で誰も

いなかった。後で分かったのだが、五十数人の一行はそれからエニセイ河を下る河船に乗せられて、北極海に近いナリリスクというウラン鉱石を採掘するラーゲルに送られ、夏間は夜がなく、冬間は昼がないという環境の中で大半が死亡したということであった。私は偶然患ったマラリアのために、命拾いをしたことになる。

一人になった私は、マラレツカ（少年囚）という一行に加わってクラスノヤルスクに向かった。このベレシルカ（囚人中継所）で東ヨーロッパから送られて来た政治犯と一緒に、引き返してタイシエットの駅で降ろされた。バム鉄道の起点に当たる駅であった。

送り込まれたラーゲルは、鉄道建設に従事する囚人達の収容所であった。枕木を造る製材所班、鉄道の路盤を盛り上げる作業班、レールを敷く鉄路班等に分類されていた。

私は路盤を作る作業班に所属することになった。五十人近くの囚人はほとんどがウクライナ、ポーラン

ド、ラトビア、エストニア、リトアニアといった東ヨーロッパの民族であり、日本人は私一人であった。ターチカという一輪車に土を満載して板の上を押して運ぶのである。鉄の小さな輪が付いているターチカは、それ自体が二十キロもある木製の一輪車である。土を満載すると百キロ近くにもなる。敷きつめてある板の道の幅は三十センチ程であり、ちょっと狂うと板の上から落ちてしまう。一度落ちた一輪車は後続の人の手を借りなければ持ち上げることができない。路床までの距離は百メートル近くもあった。

夕方、くたくたに疲れてバラックに戻ってくる。一杯のスープをすすって、泥のように眠る。パンは朝一度に一日分を食い尽くすので、昼も夜もスープ一杯をすするだけである。

三カ月後身体検査があり、私は三級者となって鉄道班に回された。体力の限界を感じていたので、レールを敷く鉄路班に救われる思いがした。朝、三十メートルもある長いレールを積んだトロッコを、機関車が押してくる。トロッコから下ろしたレールに綱をかけ

て、二十数人で枕木の上をひっぱる。レールを継ぎ、枕木とレールをポルトで締めていく。

この班でも、日本人は私一人であった。元ウクライナ軍の将校だったという班長は、日本人が珍しいのか、よく声をかけてくれた。ゲイシャ、サムライ、フジャマと言って、班長はさも日本のことを知っているように笑いかけた。「グワントンスカヤ・アールミヤ（関東軍）が、ドイツが対ソ戦を始めた時、東から攻撃していれば、敗けることはなかったのだ」コノネンコというウクライナ人の班長は、そんなことも言った。

七月、八月とまたたく間に過ぎて、九月になると小雪が舞うようになった。レールは、敷き詰められた枕木の上を少しずつ延びていった。

ある小雪のちらつく朝、二匹の小豚が私達の作業現場に迷い込んできた。「ウビーク（殺せ）」班長が命じた。五、六人で小豚を取り囲み、スパナーで頭を叩いて息の根を止めた。死んだ小豚は雪の下に隠して、その夜はスープにしてみんなで食った。入ソ以来初めての

豚汁を口にしたのだった。

日を追って寒さが身にしむようになった。うっかり素手で金具を握ると、凍りついて離れない。その朝はひどく冷え込んでいた。零下三十度は下っていたのだろう。指の感覚が消えていた。手套を脱いでみると、五本の指が白くなっている。

「どうした？」班長が近づいてきた。私はアツマロジール（凍傷かも）と言って、白くなった指を班長に見せた。「やられたな、よし、ここに座れ」班長は足許の雪を掴むと、両手で私の指をもみ始めた。「いいか、凍傷は火に近付けると逆効果になる。根気強く雪でもむことだ」

最初は進駐してきたドイツ軍と戦い、後ではソ連軍と戦ったというウクライナ軍元将校は、雪に対する知識も豊富であったようだ。十分以上ももんでくれたのだらう、ようやく指先に血の色がにじんできた。私は班長に礼を言って作業場に戻りかけた。その私の背に、彼は言った。「暫く焚き火の番をしている」元ウクライナ軍の将校だったというブルガジール（班長）

は、かつて自分の部下だった弱兵に私を重ね合わせたのだろう。生きることに精いっぱい、他人のことなど思いやる余裕のないラーゲルにあって、このウクライナ人元将校の気持ちは、今でも私の心の中に、数少ないラーゲルのよい思い出として残っている。

十一月の中旬になって、本格的なシベリアのマローズ（寒波）が襲ってきた。前の晩、疲れ切っていた私は、羊の毛を圧縮して作ったカートンキという長靴を乾燥に出すのを忘れて、眠り込んでしまったのだった。朝、靴下代わりに足に巻くバルチャキを巻きつけて靴をはく時、湿っているな、と思ったがそのままはいて作業に出た。いつの間にか、足の感覚は失せていた、作業終了後医務室を訪ねると、リトアニア人の医師はすぐ入室するよう命じた。私は班長に報告して、私物をまとめて次の朝医務室に入室した。左右の足の親指は、水をふくんだように大きく腫れあがっている。「とにかく水を出さねばなるまい」ドクトル（ドクター）はそう言っていて、私を粗末な手術台に横になるよう命じた。痛さは感じなかった。水を吐き出した親

指は小さくなったが、肉は紫色を帯びていた。

医務室には、同じように凍傷にかかったらしい三人の囚人がベッドに横たわっていた。私が空いているベッドに掛けると、隣のベッドの青年が声を掛けた。

「君、中国人か？」「いや、日本人だ」私は答えた。

「君、まこと日本人か。おれはロシアのバルチック艦隊を撃破したアドミラル・トーゴ（東郷提督）を尊敬している。彼は偉大な提督だった」彼はそう言っていて、私の手をしっかり握った。

「おれはポーランド人だ、名前はミハイル・リポベツキー。子供の頃一家でシベリアに移動したのだ」「何で捕まったのだ」私はポーランド人だという青年に聞いた。私と同年ぐらいに見えた。「一九三六年にスターリンの粛清があつて、おれのいたポーランド人村の男子はみんな捕まってしまったのだ。おれの家族も父親と兄など五人が捕まってしまった」「そんなことがあったのか」「捕まった時おれは十六歳だったのだ、二年間少年刑務所で過ごし、十八歳になって二十年の労働刑をもらった。もう十年もラーゲル生活さ」

リポベッキーと名乗った青年は、そう言うため息をついた。彼は凍傷患者ではなく、胸を患っていたように、絶えず乾いた咳をした。「熱が下がらないのだ、結核かも知れない」

それから一週間後、そのリポベッキーと私は、後方の大きな病院に送られることになった。紫色に変色した私の足指を見て、ドクトルは言った。「肉が腐りかけている、親指を切り取らねばならないだろう、ここでは手術できない」リポベッキーと私は、馬橋に乗せられて鉄道建設のためのラーゲルを後にした。銃を肩にした警備兵が馭者となつて、小柄のシベリア馬の尻に鞭を当てた。見渡す限りの白い原野。メリケン粉のような雪が、たれ込めた低い雲から音もなく降り注いでいる。聞こえるのは雪を滑る櫓の音だけである。短いたてがみのシベリア馬の足が鈍ると、馭者の警備兵はすかさず鞭を振りおろす。「スカレーイ、ベゴム（急げ、早駆けだ）」

私は果てしなく続く雪の原野に眼を注いでいた。生きて再びこの雪道をたどることはあるまい。残された

刑期はまだ長い。祖国は手のとどかない、遠い空の彼方にかすんで見えなかった。

【執筆者の紹介】

出生 大正九年、熊本県下益城郡城南町に生まる。

軍歴 昭和十六年、教導学校在学中推薦により陸軍中野学校へ。ロシア班に属しロシア語を学び、卒業と同時に北部軍参謀部付、樺太特務機関に配属、国境を越えてくるロシア側スパイの取り調べ等に当たる。

強制労働刑 終戦後ソ軍に逮捕され十年の強制労働刑を受け、ウラジオ経由イルクーツクへ、タイセット周辺の国際ラーゲルを転々とする。

帰還 昭和二十八年、病気のため帰国、肺結核で肋骨六本を切除。

職歴 町教育委員三期。

昭和四十六年より地元の会社に入社、社内報編集、従業員的生活相談等に当たる。

作家生活

帰国と同時にシベリアを題材する小説を発表、その数約九十編に及ぶ。

表彰

ペンネーム波木里正吉、熊日文学賞、西日本芸術奨励賞、九州沖繩文学賞、県賞、詩と真実賞その他多数受賞。

全抑協活動

昭和五十六年退社と同時に全抑協熊本県連合会事務局長に就任。現在県連副会長として活動中である。

(熊本県 高瀬 潤吉)

シベリア抑留

熊本県 高瀬 潤吉

ハイラル

華々しいスタートを切った大東亜戦争も、満三年を

迎える昭和十九年の秋には米軍の空爆が日本本土に近づきつつあり、日本は何処とて安全ではなくなってきた。その頃よく言われたことは、日本にいるより満州の方がかえって安全だということだった。そのような昭和十九年の十月、私は入隊のため満州のハイラルに着いた。はじめて聞く地名であり、どの辺に位置するかもわからない。しかし、日が経つにつれそこは満州の北西部に位置し、ソ連との国境の町満洲里に近い所で、広大な守備陣地のある所だということ、そしてこれまで私の郷土熊本の一部隊が守備していたこと等もわかってきた。陣地は広大だが守備隊が常駐する様子はなく、近くの兵舎で初年兵の教育を受けた。冬に向かっていたときであり、営舎の二重ガラスが真っ白に凍ってわずかにガラスの上の方からだけ外がのぞけた。班長の部屋に行くと二重ガラスの間は自然の冷蔵庫になっていて、時々凍った魚が何匹か入れてあり、休日に近くの河から釣ってきたのだということだった。夕方入浴して兵舎へ帰るとき、下げていたタオルはコチコチに凍って、上を向けると手の平の上で立った。南